

佳作

心あたたまるあいらつ

熊本県 熊本県立天草高等学校一年 森さわ

「おはようございます。」

この九文字とちよっとした笑顔で、温かい気持ちになれるということを知った。

中学二年生の十二月。私は通っていた中学校の生徒会長を務めることになった。そこでまず取り組もうと思ったのは、あいらつ。しかし、あいらつ運動に取り組むのにこれといった理由はなかった。これまでの生徒会も長年あいらつ運動を行っていたからとりあえず引き継いでおこう、そんな気持ちだったのだ。これまでのものは、クラスごとにあいらつ運動を行い、それを生徒会執行部が点数化して、得点の低いクラスはやり直しをするというものだった。生徒会役員になるまで私はそれを面倒なものと感じておらず、「ただ大きな声を出せばいい」「適当にやってもやり直しがいいならいい」と思っていた。あいらつ運動に対するそんな思いがあったか、私達は卒業式や入学式、体育大会等の学校行事の準備、運営に追われる中で、あいらつに対する取り組みを後回しに

ち続けた。校長先生や教頭先生と一緒に取り組んだ日もあったし、学校の外に出て地域にもあいらつを広めようとしたことだってあった。こうしていくうちに、少しずつ少しずつみんなのあいらつが変わってきた。ただ通り過ぎるだけだった人は会釈をしてくれるようになり、疲れた顔をしていた人の顔にはほんの少し笑顔が見られるようになった。

そうしてあいらつ運動を続けていたある日、私は一人の生徒にあることを言われた。その日は朝から打ち合わせがあった、たまたまあいらつ運動をしなかった。するとある男子生徒が私に声を掛けてきた。その言葉は、「会長、今日あいらつ運動さぼってたな。」

こんなことを言われたら普通は腹が立つのかもしれない。でもこのとき私は不思議と憤りを覚え、私達の活動を見てくれていたんだといううれしい気持ちになった。地道な毎日の活動が学校に浸透してきたことを感じ、それが自信につながった。

それからというもの、さらに心のこもったあいらつができるようになったと思う。にこっと笑って

「おはようございます。」

と言うと、多くの人が同じようにあいらつを返してくれる。こちらからあいらつするより先にあいらつしてくれる人だっていた。そんな二十五分間を終えた後に残るのは、早起きのつらさでもなくあいらつ運動に対する面倒

していた。

そんな私達生徒会に転機が訪れたのは七月。保護司と呼ばれる地域の方々と、社会を明るくする運動の一環としてあいらつ運動を行った。玄関の前でピラを配りながらあいらつをするという、たった二十五分間の活動。特別なことなんて何一つしていないのに、なぜかさわやかな気持ちになった。自分達のあいらつに対してあいらつを返してくれたことがたがうれしかった。

このある朝の体験で私達は変わった。まずこれまでの取り組みを振り返ると、人からやらされるという意識があり、心のこもったあいらつが定着しなかったという結論に至った。そこで私達がめざしたのが『さわやかでやさしいあいらつ』。

あいらつした人もされた人も温かい気持ちになるようなあいらつにしようという決め、活動を開始した。

しかし、初めはそう上手くはいかない。こちらがあいらつをしても黙って通り過ぎていくし、かろうじて返してくれた人の顔に笑みはない。理想と現実はかけ離れていた。あいらつ運動に行くために毎朝早起きして、他の生徒より早く学校に行かなければならなかった。朝の寒さも身にしてみても心なしかあいらつが機械的になり、目指すあいらつから遠ざかる日々もあった。それでも、毎日のように生徒会室に集まって何度も何度も話し合った。朝から別の用がある日以外はなるだけ毎日玄関の前に立

臭さでもなく、さわやかで温かいちよっとした幸福感だった。自分が笑顔でいるだけで、心持ちをほんの少し変えるだけで、こんなにも清々しい気持ちになれるんだと感動を覚えた。たった九文字の言葉を持つ、人を幸せにさせる力を心から感じた体験だった。

私は元々気持ちのよいあいらつを自らすることが苦手で、いつももじもじしていた。だがあいらつの持つ力を知っている今は、あいらつを昔よりずっと大切にしたいと心から思える。人と人が始めにとるコミュニケーション、あいらつ。あいらつする人が心を込めた分だけ笑顔でいた分だけ、人と人との心をつなぐことができると思っている。私はこれからもずっと、さわやかでやさしいあいらつをし続けていきたいと思う。そして心を通わせ、たくさんの人と幸せを分かち合える、温かい心を持った人になりたい。